

【現状】

- 校内研修への取り組みは、消極的である
- 校内研修について、共通理解が足りない
- 研究授業に消極的である
- 研修時間の確保が困難である
- 反省・評価は形式的である
- 研究会は発言が少なく低調である
- 管理職の指導助言がほしい
- 研修意欲が欠如している
- 多くの授業を参観したい

以上の問題点をまとめると、次のような課題にまとめられる。

- 「研修意欲」に関すること
- 「校内研修推進」に関すること
- 「指導助言」に関すること
- 「校外研修」に関すること

(3) 担任等からみた教員研修に関する意識の実態

教員研修に対する意識調査の結果は、校種の違い、経験年数の違いにより様々な結果がみられた。

① 研修の在り方(研修の機会、研修の形態、研修時間)について

「効果的だと考える研修の機会」については、小中学校をみると経験Ⅰの教員は『校内研修・研究会』を挙げ、経験Ⅱの教員は『自己研修・希望研修』を挙げている。高校の教員は、経験Ⅰ・Ⅱともに、『自己研修・希望研修』を挙げている。

「有効だと考える研修形態」については、どの校種の教員も、『演習・実技研修』を挙げている。

「個人的な研修時間の確保」については、ほとんど確保できないでいるのが現状のようである。

② 研修の内容について

「今まで役立った研修内容」「今研修したい研修内容」については、校種・経験年数に関係なく『教科指導』を第一に挙げている。

③ 研修意識について

ほとんどの教員が、「研修することに意義」を感じている。

現在、取り組んでいる「個人の研究テーマがあるか」ということについては、小学校経験Ⅱの80%あまりを最高に校種が上がるにつれ減少する。経験Ⅰと経験Ⅱの教員を比較すると、どの校種でも経験Ⅱの方が高い数値を示している。

「研究授業への取り組み」については、小学校で積極的に取り組む教員が多いのに対して、中・高校では、消極的な姿勢がうかがえる。

④ 研修の工夫(評価)について

「定期的に研修時間を設定しているか」では、設定時数に差はあるものの、小・中学校では設定している学校が多い。高校では、個人に委ねられているためか、計画的な時間設定はあまりされていないようである。

「校内研修の推進者」については、小・中学校は「研修主任」、高校は「教務主任」が中心になっている。

「校内研修の満足感」については、「授業研究」には大半が満足しているが、「個人研究・実技研修」には満足していない教員が多い。

「校内研修推進上の問題点」としては、「校務の多忙さ」を挙げている。

「校内研修における反省や評価」については、校種に関係なく概ね行われているようであるが、形式的過ぎるという意見もある。

「研究主題や方法等を全体が理解しているか」ということについては、共通理解不足が指摘されてい